



## ⑥ 太多線

明治33年に、中央線の名古屋―多治見間が開通しましたが、東濃地方と県庁のある岐阜市を行き来するには名古屋を経由しなければならず不便で、太田を経由する鉄道建設の要望が大きくなりました。それを受け、大正6年に美濃太田―多治見間の鉄道敷設が帝国議会で承認され、美濃太田駅開業の翌年から建設準備が始まります。

当時、多治見と御高の間をつなぐ東濃鉄道が大正7年から軽便鉄道として運行していたため、鉄道省はそのうちの多治見と広見（現在の可児駅）間を買収し、線路幅を拡げて利用することにしました。

大正14年に広見と美濃太田間の新設部分の着工がはじまり、木曾川に架かる鉄橋は当時の最新工法が用いられました。

昭和14年に今渡ダムができる前は、木曾川の本流は可児側（南側）を流れ、美濃加茂側には河原

が広がっていました。そのため、橋の川部分は橋脚間を長く取り、上部をトラス式の骨組みにしているのに対し、河原部分は橋脚を短い間隔で立てて桁を乗せる形となっており、橋の構造が当時の川の様子を物語っています。

昭和3年10月1日に、中央線と高山線を結ぶ重要路線として太多線が開通し、美濃太田駅は岐阜県中部と東部をつなぐ拠点駅となりました。



▲美濃川合（昭和43年）写真提供：渡辺誠治さん

文化の森企画展「鉄道のまち」展  
（12月18日～3月6日）を開催